

初めまして。わたくしはアイリクともうします。オスロ大学日本語科の3年生です。今日は日本の数学について話してみようと思います。

しかしその前に少し自分のことを話したいと思います。私の好きな科目、というより趣味は日本語と数学です。数学ではもう修士号を取りました。それで今は日本語を勉強しています。ですので今回は数学にも日本にも関係していることについて話してみたいと思いました。それで日本の数学、和算について話すことにしました。

和算は、江戸時代にソロバンが日本に入ってきた時にできた日本の数学のことです。最初は和算には算術しかありませんでしたが、せきたかかず（関孝和）やさわぐちたかゆき（沢口一之）という和算家が和算を大きく発展させました。例えばこの二人の和算家により二次関数や三次関数を分析することができるようになりました。特にニュートンやリーブニズと同じ時代に生きていたせきたかかずは彼らの影響なしで微積分学に似ている和算の分野を立ち上げました。洋算における微積分学の開発は一番革命的な開発だとよく思われています。ですから和算でもこう言う発展があったことは和算がヨーロッパに負けず進化しており、和算家の素晴らしい実績をものがたっていて、本当に感銘を受けます。

しかし、残念ながら洋算と和算の間には決定的な違いがありました。和算は算術と幾何学以外、ほとんど趣味としてしか使われていませんでした。一方、洋算は力学や流体力学の物理学に応用されていました。ですから物理学が洋算と共に日本に紹介された時、和算は変化に適応できず、急速に衰えてしまいました。

和算は現在研究テーマとしてしか関心を集めていないとは言え、歴史的には日本の驚くほどの科学的で教育的な成果を示していると思います。まず、江戸時代の後半は侍や身分の高い者はもちろん、商人や身分の低い者もある程度和算を使いこなせていました。これは和算の教えが一般の者にも行われている証拠となるでしょう。それと同時に前に言っていた通り、日本人の和算家が洋算に負けない数学の発展をしていました。一般人に和算の教育をしながらこう言う発展ができるのは正に日本の数学者の質を表しているのではないのでしょうか。

このスピーチのために和算についていろいろ調べたことによって、一人の数学者で日本に興味を持つ者として、日本をますます誇りを持つようになりました。ご清聴ありがとうございました